

北辺の悲劇 アッツ島で守備隊が全員玉砕

守備隊は盛岡部隊で編成された第62部隊が主力で、部隊長山崎 保代大佐であった

山崎部隊は混成旅団に近い兵力7,500人を率いて赴任した

その途中、部隊は米軍の攻撃によって3分の2は海没、あるいは引返し、わずか2,576名が上陸
まもなく米軍第7師団約2万の兵力に攻撃されて、玉砕、全滅した

この日記は、昭和18年7月 アッツ島遺骨拾集団に岩手県人代表として参加した、

三田 勇治（当時県議）が書き記したものである

アッツ島で玉砕した県人の中に、三田 循司（旧制岩手中学 5回生 昭和10年卒）がいた

三田 勇治氏は三田 循司の厳父である

この日記は遺族の許可をいただき公開するものである

昭和28年7月1日

午後8時10分上り準急花巻駅発上京

午後7時頃より坂本町内有志100数名自宅に集合、自治会長より重大な任務にて出発する
自分に対し無事帰国されん事を祈る挨拶あり、自分より多数見送り下された御礼並びに
自分の任務の重大なるにかんがみアッツ島戦死者の遺家族の心中を察し皆様の御期待に
そうよう努力せん事を申し述べた。尚県議会より川村局長県会より祭文並びに餞別持参
遺族連合会長梅津県議、議会より関秀伍氏等わざわざ御出下され感謝にたえなかった。
それより7時半頃自宅前より多数の見送りの方々と共に駅にむかい駅頭にて前同様の
挨拶致し乗車せり。見送りの方々の主なる方々県会代表川村局長、全議員代表関氏、
遺族県連合会長梅津氏、花巻遺族代表(千葉会長)佐々木圭三花巻町議、稗貫地方事務所長
郡社会福祉協議会、花巻社福代表、県郡医師会長、その他坂本自治会員全員300名
以上であった。

黒沢尻駅には県議加藤勝男氏送り出られ一関駅には県議佐々木一郎氏でられ激励の言葉を
頂いた。感謝にたえず。

昭和28年7月2日

上野7時25分着 倅は駅頭に迎えに來り荷物を運び、県東京事務所よりハイヤーを御廻し
下され事務所に到着き午後1時引揚援護庁に集合。

長官より人事異動通知書を受領した。

引揚援護調査員

アッツ島における戦没者の追悼健碑等に関する
派遣団員を命ずる

それより団長より注意事項等打合せを致し5時頃終わり帰宿

昭和28年7月3日

船に積込大荷物3ヶ正午迄に援護庁へ持ち込む事になり持参致し長官より昼食の饗応に
預かり、午後1時ごろ退庁

郷里の方々とほかの用件につき会合し帰宿

昭和28年7月4日

午前11時半援護庁に参集、一同自動車に分乗

海外同胞戦没者遺霊委員壮行式に参列

委員長安藤正純氏、木村長官両副委員長、アッツ島遺族代表、東京都遺族会代表、
全国遺族会長等約150名位参集のもとに開催。派遣団員16名全員はテーブルに一列に並び
吾々に向合せる方々は政府委員、海外同胞戦没者委員長、副委員長等。

開会の辞は木村長官、壮行の辞は安藤委員長、アッツ島遺族児一少女の挨拶、

アッツ島生残り20余名の一人佐藤某の挨拶等あって不破団長の挨拶等終りビール簡単な

る洋食にて昼食を頂く。
副委員長の発声にて吾々派遣団の万才三唱して散会。
午後1時45分されより帰宿
石鳥谷連中と共に外出

昭和28年7月5日

谷村氏全夫人と共に送別会に招かる。佐々圭、永田5人にて深川一力にて夕食馳走になり
8時半頃帰宿

昭和28年7月6日 曇天

5時起床、箱崎県議、県道路課長、米谷、北山、慥
朝食の会、ビール3本にて壮行の会
8時20分県自動車にて厚生省に向い8時半集合
8時40分出発 芝浦竹芝棧橋着乗船
10時中山マサ厚生政務次官(厚生大臣代理)運輸事務次官、国会議員2名、海上保安庁長官
等の挨拶。ついで団長、船長の御礼の言葉等ありて、船上の式は終り、見送り多数より
テープは船になげかけられ11時船は動き出し一路北に向う。
私と北海道の藤咲氏とは甲板のま奥上等室、宗教家と吾々は上、後は全部下の室。
曇りのため陸地は見えず波静か
午後1時半昼食、5時夕食、8時夜食、9時半就床。身体調子よろし
(芝浦見送り人、山岸、箱崎、米谷、佐々圭、永田、永井俊、慥、花巻助役他)

昭和28年7月7日 曇 5時起床

洗面等して海面ながむるも陸地見えず、8時半朝食
海面ながむれど陸地見えず、仙台沖のごとし、船は左右に動揺10度以内。
11時40分より昼食、今頃は金華山沖の由、波は割合におだやか、甲板に出て四方なが
むれども大海原のみ、此辺より岩手沖らしいが見えず
5時夕食、8時夜食ソーメン、9時寝つく。
船少々動揺すれど何事なし、今日も暗くなった。寝床の上にて本を見るが直ぐ
ねむくなる、退屈だ、2,3人具合悪い人あるごとし、9時半頃より動揺始める。
15度位の由

昭和28年7月8日 曇、雨

6時起床、便所へ行くのに船の動揺のため歩けない位にゆれる、いろいろのものに
つかまりようやく小便する。吾々の室には洗面する設備があるから片手はつかまって
右手だけで歯ブラシも顔も洗う、直ちに寝台に昇り煙草をすう。今7時35分
8時朝食
北海道の沖にかかった由、大分揺れる、同室の藤咲氏はとうとうハキ出した、
僕はなんともない、雨が降り出した、寝台にあおむけ頭がボンヤリして何も書けない
この文あとにて書いている。
午後1時30分釧路港に着く、大分雨が降っており海岸より通りは見えない。
ドヤドヤと北海タイムス連中、釧路市職員、支庁長、市長、市議長、商工会議所会頭
遺族の方々、子供連れの未亡人、父母等約100名位も船の中に入り、花輪、生花其の他
供物等持ち込まれ、涙と共に頼む心情、吾が身につまされ感慨無量であった。

昭和28年7月9日 晴天

朝5時頃便所に行く床に入り6時洗面、窓から水上を見れど晴天の如し又寝台に昇り
読書始むるも又ねむくなる、赤ん坊のようによくねむれるものだ、尤も薬の故も
あるだろう、トラベルシンという薬は船よいの外に効能があるそうだが多く用いると
ねむくなるそうだ、その故かもしれない。
8時朝食すまし天気が良いので甲板にのぼって見たら、遠くに漁船23隻見えるが、
警備船保安隊のだと云う船(450屯)が吾々の船に近づいてきた。

今平行して進んでいる、多分見送りのつもりだろう
北海道沖を過ぎ千島沖に入り始めたところの如し、間もなくわが船を一周して分かれた。
12時の昼食の時は風も弱まり波は静かになったが霧がかかってきた、
4時頃から1分おきに船では汽笛を鳴らす、霧が深い、然し四方の海面は相当広く見える
霧の時は国際法により鳴らす事になっているようだ。
只今は千島列島エトロフ島西南沖航行中の由、
5時夕食少し寒くなったと思って聞いたら7度の由、冬シャツ上下着る、夜半に今まで
茶も飲まないから小便に起きなかったが今晚は催す、1時に用便後波おだやか寝ごこち
良し、本でも見ようか、このベットにはまくらの真上に昼夜電気がついて便利だ、
あおむけで床の中で見られる。

昭和28年7月10日 晴天

6時起床洗面、動揺少し、
8時半朝食後航海長に聞けば千島列島沖65マイルを航行中なる由、霧のため10米四方も
良く見えず、10時入浴、室にて読書する、甲板に昇り四方見れど静かな上天気
見渡す限り青海原、霧もなく水平線まで見えはるか左34哩かなたに漁艇一そう見える
鮭の引網との事、昼食の時、団長より明日の海上追悼式について打合せあり、
午前10時甲板にて行なうことに決めた、午後4時頃どうも腹か胸がムカムカする、
体の調子は良くなく床に入り込む、今晚は夕食やめよう、船に乗ったら酒不足と思ひ
心配であったが酒がほしいとは思わない、水筒に5合入れて来たが皆に封のコップ
一つづつやったり自分で三ッ四ッのんであとウイスキー小びんの封を切っていたら
釧路で慰問に来た坊さんが一人で飲んでいて、又1本あけたら封のかけようが悪く
もってしまった。政府委員相良という人が日本酒6本持っているので1本わけてもらい
ちびちびやると考えていてもあまり飲みたく無く矢張り陸地と違って体加減がよくない
故か、夕食はよそうと思つたらおつけに変わりそうめんだと云うからそうめんだけ
食べて、全員にてアツツ島の歌を練習する、俺はまだ節がよくわからない。
千島列島北東300哩航行中の由。

昭和28年7月11日 晴天

今日から時計を1時間進ませることになった、いよいよアリューシャン海域に近づいた
6時起床洗面
8時朝食 本日海上慰霊祭 政府委員は甲板で準備中
東経155度～10度 北緯40度～50度
東経155度～10度 北緯40度～50度
千島列島海域 戦没者 3,400名
沈没艦艇 72隻

船はとどまり午前11時(日本時間午前10時)より、定刻始められた。
花輪大小60以上、日本政府、日本遺族会、海外戦没者遺族委員会、東京、北海道、
宗教連盟等その他、神官の昇神の儀からはじまり、団長追悼の辞、遺族代表の詞
(野口惣海軍遺族)祝詞、キリスト教、佛教の順にて読経等を終り、玉串奉典、団長、
遺族全員、政府委員、船長、船員代表終わって花束、千羽ヅル等海中に投げ入れ船は
静かに1周して徐々にアツツ島にむかって動きはじめる、千羽ヅルは思いなしか船の
周囲からはなれなかった。
英霊の安らかに昇天あらん事を祈りながらいつまでもいつまでも見送った。
この日晴天にて波静か、大海原は鏡の如く、上甲板にのぼりはるかに慰霊せし海面を
見送り冥福を祈った。
この付近にて3,400柱の戦没者とは全く戦争の無残なるを思いつまでも感無量であった。
海戦に没した水清く屍は魚のえじきとなり陸戦の戦死者なれば骨は見られず共其地の
土か小石が持ち帰れると思うがそれも出来ない。
親や妻子の身となれば如何なりかと胸にうたれてしばし呆然とした、ここは千島列島
ホロシュロ東南150哩カムチェッカ南端より160哩の地点の由、こんぺきの海面に何知らぬ
海鳥も飛上がっており海面に浮び英霊に礼拝する如く思われた。

あまり天気が良いので甲板に出て水面をながめていると夕日はまさに水平線に入る時であった、時計を見ながら見つめていると鏡のような太陽が夕やけに色まみれて入る景色は何ともいえない美しさであった。次第に没していき3分位で全部消えたが時に日本時間6時14分半であった。海でなければ見られぬ光景で思い出の一つとなると感心した。

今晚から又1時間時計を進める。

昭和28年7月12日 晴天

7時起床 8時朝食サロンで会食の祭今晚又1時間進ませ明日1時間進ませることを船長にいわれた都合4時間日本時間より進ませるわけでアッツ島着は14日の予定だが米国では13日という事、13日は2日ある勘定ややこしい。

今日少し寒い故か体の調子が悪い、風邪薬をのんだ、外は霧で遠くは見えない、昼食は止める、晩食は少し食べた、どうも具合悪い、あるだけシャツを着る、薬を呑んで外とうを上にかけて8時頃寝につく。

昭和28年7月13日 曇

6時起床、具合しっかりよろし、丸窓から海面見れば波おだやか、但し霧はかかっているようだ、気分が良いから洗面して藤咲氏と雑談する。

朝食8時、それから団長から明日の遺骨収集に付きいろいろと話合いあり、午前中に入浴する事なり居室に引上げ11時頃入浴、今日具合よし、12時昼食是より又1時間進ませる。

室に入って読書していたらイルカが方々に浮くと聞いたから上甲板に上がって見たらそちらこちに浮き出る、船の直ぐ近く5米位に出るのを見たがそれはオットセイの由、ずいぶん速力が速い、スーと50米むこうに逃げ去った。

6時半夕食、食後甲板に出て東北方霧の間にボンヤリと島影見ゆ、アッツ島西端の由、待ちに待ったアッツ島、船の望遠鏡で見ると霧のため良く見えない、30分あまりでその島影も見えなくなった、寒いから室に入る。

雨がポツリポツリ降って来た、マサッカ湾中浜に8時40分入港、米兵10名棧橋に出ている団長外政府委員、米兵（陸軍少尉隊長？）共船内に入り明日の打合せ等している俺たちは甲板上で米人と話しているものあり、魚つりと糸をたれるものもあり直ぐにかかった、かじかの由、バラックが大分たっている、4階建のビルディング様の建物もある、夜になってからアリュート族の土人（デエビ）23才の青年が船にたづねて来たアッツ島に住んでいる由、今は1人もいないそうだ、この青年は米人の船に乗ってこの島々をまわっているとの事、1時過ぎた、もう寝る事にする

（港の入口で相良氏にテープレコーダーに入港感想を吹き込めと云われ一番に私が入れたNHKのレコーダーの由）

米隊長の話によれば島々には道無きため行かれぬとの事、何れ明日現地に出るからとの事とする。

昭和28年7月14日（13日）

朝6時に藤咲氏が港の山々が美しいから棧橋に出ようと云われ港をながめると米兵のバラック（カマボコ形）が沢山見えるカメラを持ちパチパチと12枚とった、とっているうちに霧が急にかかってあたりは山も見えなくなった、朝早かったからまづいいところをとったと思う。

8時朝食、水補給のため別の棧橋に移動する事になった、この湾には棧橋が2本ある米兵の仕事は大がかりだ、ここの隊長は海軍少尉、この列島の隊長はアダック島にいるワグナーという人だそうだが多分日本の日付にて14日に着くというのは米国の13日であるから米国の14日と間違い日本の15日に着くものと思っていたかと察せられる。ワグナーの指揮でなければなんともならないので今日多分14時頃飛行機で到着の筈、われわれはそれを待たなければならないのはめにとなった。

俺は3人で棧橋を渡って陸地に行く、立藤はきれいに咲いていたからそれをつんで米兵の本部前辺まで行ったら呼びもどされた。

団長、政府委員はこの隊長ツウエ少尉の案内で虎山付近の日本兵の墓地(25柱)を見に行ってきたそうだ、昼食の時報告された。

セミツ島は東方に見える、待っても飛行機はなかなか来ない、漸く4時10分頃東セミツ島の北の方にポツリ見えはじめた。4時15分道路上に着陸した、これから交渉の結果出動する事になるだろう。

今か今かと出動の準備して待つもなかなか命令はこない、6時になっても8時になっても来ない、30分過ぎて漸く暮りよう3人連れてワグナー大佐と思ったら日本通のコマンダー(中佐)ジェット氏であった、中佐は船に見えられた、それから政府委員と交渉、今10時10分だがまだ交渉中の由、11時頃われわれもサロンに行き面会し向こうも紹介されわれわれも名前を紹介して握手した、4時間も内地よりおくらせた時計でもうすぐらくなりをはじめた、今日も無駄に暮らした、何が何だか解らない、日本政府の手違いだか米国の側が悪いのだから、何れにしても前々から良く決めておかないのは政府の責任といわざるを得ない。

9時30分頃漸く米国の諸氏もかえった。

それより食堂に集まり団長より明朝7時より遺骨捜査に出発する、米側の注意条件は棧橋以外は上陸かなわぬ、写真は遺骨慰霊祭等以外許可せず、日本兵墓地並戦った箇所はジェット自ら案内するという事を申し渡された。

今日は休む事になり室に入り1時20分床に入った。

(1日だけ日延べする事に本国政府の了解を得た由)

昭和28年7月15日(14日) 濃霧なれど雨降らず

6時起床、6時朝食を終り7時全員トラックに1台ジープ3台にて出発

俺と藤咲氏と宗教家3人は赤十字の箱車に乗った、前方と後方が見えない

然しゴミもかからずゆれないから別待遇だ、虎山の西端高地に47柱と30米位はなれたところに28柱と2ヶ所日本兵墓地が米軍に依ってつくられてあった。

ここは最後の突撃(170名)の場所だそうだ、2米に5米位四方に鉄条網のさくをめぐらし正面に十字架それに死体の数を書いてあった。

それより宗教家の祈り、吾々1行の外に船員16名黙禱して発掘をはじめた、ずいぶん深く掘ってあった、岩石まじりのため10年も過ぎたから堅く予定より長くかかった。皆汗どろとなりへたへたになった。

小銃の玉を持っているもの、顔も手も骨丈のもの、たいていゴム長をはいていた。

船員方もおかげで一生涯命やってくれた、4時間位かかって漸おえた。

10年たっても北の国だから髪の毛のはびており、内臓はくさって悪臭が入り自分の子がでなければ良いとさえ思われた。5名だけ名前が確認されたが後は不明、鉄カブトをかぶって手流弾をもっていた者もあったが服を引れば頭が切られたり本当にいやであった。火葬場を2ヶ所墓地の間に鉄板を敷き其の上に薪をならべ遺骨を上にあげ、更に揮発油を掛け火を入れておがんだ。

吾々は係りの石屋鎌田山本外船員1名を残し更に確認された大沼のほりに向った。

これより一応見てまわる事に決めたので此所には4ヶ所50名、67名、283名、100名計501名押んで更に小沼方面へ、此所で自動車をすて徒歩で小沼の上の岡についた、この岡には6ヶ所墓地があった。

熱田川右岸高地に1体墓地、2体1墓地何れも日本人がたてたもの、熱田富士の裾まで進んでみたがそれらしきもの見えず、ただ如何に激戦であったかを思わせる破片、電話線はそのまま藻がおいかぶさっている所もあり、出ているところもあり、日本なれば現在使用中の電線さえ取る不心得ものもあるのに持てる米国としてはそんな物見向きもせず放っておく有様驚きいる。

熱田富士は霧のため裾が少し見えるのみ、ついに全部見る事が出来なかった。

此辺観武原と名づけ渡辺部隊即ち303大隊の激戦地最後の夜襲は此所から突撃して虎山続きの高地まで進み、掘返した墓地で玉砕したらしい。

墓地の少し下約300米の地点に山崎部隊長の戦死の場所と3尺4方位のコンクリート(高さ1尺5寸)位其の上平面に山崎部隊長の戦死の場所と銅板にローマ字にてほりつけ米国兵によって建ててある。

循司は渡辺部隊であるから最後まで残ったか前にたおれたか不明であるけれど、5月12日から上陸した米軍においつめられ第303大隊の所に皆集め山崎部隊長と共に最後の突撃したらしいからアツツ島部隊本部は東浦にて最後に渡辺部隊のところに集ったと思われる。この地点付近で循司は死んだ事はまちがいあるまい。
循司は歩兵砲で中隊長は橋場中尉となっている。虎山付近にいたようで敵の上陸部隊は強力のため本隊に加わったとすれば最後まで残ったうちに加わったか、あるいは前にたおれたか、われわれが堀かえしたうちにあるかわからないが熱田湾より虎山の間で戦死したと。

熱田富士の裾の熱田川の上流に滝になっている所があるが、それより川ぞいに下り熱田湾口に出るまで野戦病院があつて、そこにどうくつがあると聞いたが見当らず湾口に出た。此にアリュート族があつたところの由なれども今はおらずロシアの教会があつたらしく印があつた。

浜で少し小石をポケットに入れた、この湾内に米国の上陸用舟艇を4隻程捨ててあつた、浜つたいに高地をめぐり元の位置に帰った。

団長より今まで見た墓地を全部掘返すかどうかと遺族5人に相談されたが全部掘返すとなれば10日以上を要する、3日間よりないのだから出来ない事に意見一致、然も死体は米軍によってねんごろに葬られている事であり、明日と明後日まで出来るだけ全戦跡をたづね、もし洞くつ等にそのままの死体でも見つけたら持帰りだびにふして帰る事に決め午後9時頃自動車にて帰船した。

昭和28年7月16日(15日) 霧

5時起床、6時朝食、7時出発

今日はA班、B班とわかれA班は米船にのり出航し海岸沖を通り北海湾(ホルツ湾)約3時間にて西浦でボートにのり更にゴムボートに4人位づつ分乗して陸に上がりそれより2班にわかれ、一方は芝台方面、われわれは荒井峠方面に向うことなり米国コマンダー共5名相良氏、藤咲氏と僕、保安隊2人三上川を渡るべく上流に上りはじめたら日本飛行機1墜落しあるを発見した、翼にも機銃痕も弾痕が沢山みられた。

この付近は原になっており横にもたてにも土手の如きもの200米位おきに細長くもり上げておる、日本兵の仕事か米兵の仕事か僕にはわからない。

それより川をこそうとしてなるべく浅瀬を探したが仲々見当らないのでこの辺がよかろうと米兵はまづこした、吾々もズボンをまくり靴を脱ぎ手に持って入ったら切られる位つめたい、雪どけ水だからさされるようでふるえあがる、我まんをしてこした米国のジェット氏は入って又上がり冷たいので仲々入れない、米兵は先にこして笑いながらみている、日本兵なれば上官をおんぶするのに職務以外の事は上官でも自分でする習慣の如くみられ不思議であつた、漸く思いきってこしてきた。

一行は更に進んで立派な道路に出た、ジェット氏は非常に速足にてわれわれはおいつくのに容易でなかつた。汗は出る、藤咲氏と2人はここでもしんがりをつとめた。

東浦平地に出た、ここは山崎部隊本部のあつたところ、道路上には小銃の薬きょう、拳銃の薬きょうが200も300も落ちている。この辺の道路は米軍の作ったものと思うが戦争後なれどこんなにあるわけがないと思われるのに不思議におもわれる。

東浦平地についたが12時を過ぎても昼食と云わない、仕方がないからついてゆくとここにも米兵の仮住宅の空家が沢山見られる、とにかく平地があれば至るところにバラックが建てられそのままに空家にしている、カマボコ形あり4角形あり、くさらしておりもったいないようだ。これも米國流か、小野川に1町程もある橋を渡り荒井峠の上り口にきれいな滝があるが、そこで昼食を滝を見ながらとった、午後2時近い。それよりつまさき上がりの山を上がり道路に出て、ところどころの雪をふみふみ峠まであがった、峠の頂上からむこうを見渡せば吾々の入港したマサッカ湾の北浜辺がみられ景色は非常によい、道路に出て西浦の港までたどりついた。

三上川の川口をゴムボートにて川をこし今朝着いた港に帰ったら芝台行きの一行が皆帰って来ていた。それよりボートにて本船にのり米船の休憩室にて船長の御馳走にてサンドイッチ、ミルク、砂糖入れ放題コーヒーのみ放題というので本当にうまかつた。野菜と肉をはさんだサンドイッチ2つ、コーヒー3杯位のんだ。

船は9時半頃マサッカ湾中浜のわれわれのところについた、それから入浴したり食事をたべたりして12時頃に床に入った、つかれてぐっすりねむって何も書くことも出来ない。B班は団長不破氏以下17名、昨日発見した大沼小沼、熱田川右岸墓地を訪ね「戦没日本人の碑 昭和28年7月建立 日本派遣団」なる木標を建て供養したる後熱田湾東海岸に至り2ヶ所の洞くつにて海軍江本弘外6名の遺体を発見し現場で供養波々伯部隊、井上隊はこの辺まで退却して山崎部隊と共にこの陣地で敵と戦ったと思われる。西側の山は霧のため頂上が見えぬ、30分休んで又引返して東浦の山崎部隊本部のあったところに行くべく滝の所まで下り小野川の右岸沿いに下った。この平地には大分砲弾の落下したところは方々に見られ草の根のた、めもくもくして歩きにくい。砲弾の落下したところは草がはえず穴になっている、500米下ると日本兵の使用した直径2尺5寸位の釜が赤くさびて捨ててあった。1里以上降って見たが死体を埋めておるところも見えず急な山に川が付きあたって進むことが出来ないで山の中腹の川べりの石の上に線香ろうそくに火を点じこの辺一帯の英霊を拝して引返して遺体の1部を収容して帰った由。又別班は石田、杉山、山崎、野口、船員6人と土人にて佐藤川を渡り芝台、三上川の流域更に舌形台等を調査して北海湾西浦上陸地点に帰られ吾々を待っておった由。この班にも遺体墓地等発見せざる由。

昭和28年7月17日(16日) 霧 晴天

5時起床、6時朝食、昨日米兵がわれわれが上陸中に釣ったカレイ15本もらったのを煮付として食べた。

8時出発全員自動車トラックに乗りマサッカ湾より荒井峠まで調査し午前中に終り、午後は慰霊祭を行なう予定にて臥牛山辺より荒井峠に向って雀岡にそって進んだ、荒井峠まで自動車道路があるが雪のために上がれず途中下車、米兵の案内にて上がったが5体の墓20米上方に10柱の墓が見つかった。

それぞれの宗教家達の祈りこの後皆でおがんだ、橋場隊、本名隊がこの辺で戦ったのかも知れない或はこの墓の内に循司のもあるかも知れない。

それより荒井峠に向って進んだ、然し僕と藤咲氏は頂上は前日見たから裾野にいて花を取ったりして一行の下るまで待つ。この辺には弾丸の破片は沢山ある、如何に米兵が上陸と同時に打ち込んだかがわかる。僕1人もう1度15人の墓地にもどり、安らかにねむられるようにと祈り

一同自動車の待つところまでもどった。

僕と藤咲氏と宗教家3人は米兵の案内にて基督教の教会内部を拝見した。

今はほとんど使用しないようだ。上陸と同時に建てたらしい、何れにしてもバラックが沢山たっている、みな空家、今アツ島には吾々が上陸したマサッカ湾に29名位おり外に1800屯の軍艦1隻(4月～9月)だけ、建物は沢山あるがみな空家そのままにしておいてある。

一同12時半頃帰船午後2時より慰霊祭に望むべく1時頃昼食をすまし、準備して自動車にて建碑の場所にむかった。ここはエンジヤヒルといって虎山続き臥牛山の辺にて大沼を眼下に見おろし和田沼も見えマサッカ湾に近く然も最後の突撃せしところ故ここに決める事に一同異議なかった。

碑石の後にガラス箱をうめ、その中に皆様から預かった品々を入れ小石、土をかけた。米国ジェット中佐を始めキエン少佐、ツウエー少尉等40人位参列、われわれ一行に船員40名位参列しおごさかに行なわれた。花輪7～10位山崎部隊への吊旗、岩手県知事よりの花輪もかざった。神官の降神の儀に式は始まり、除幕式、団長の追悼の辞の朗読、遺族代表山崎氏、岩手県議会の祭文は僕、京都市の追悼は野口氏等終り、それより神官の祝詞、基督教、佛教等の礼拝約2時間で終了した。

みんなで玉串、線香を上げ心ゆくまで拝んだ、米人は花束3人が上げた。

息子よ、皆様よ、遠からず私も参ります。

その時は心ゆくまでありしこの世の事も話合いましょう。

循司よ

親として考えて見るといたらぬ事ばかり多くすまんと思っている。
俺も65才、長い事はあるまい。死に場所は遠くはなれてもあの世にいけば皆あつまって話しよう。
この世では余り不運であったお前は必ずあの世では幸福でいられると思う。
神は総てに公平であるべきだ。
吾々は神の公平を信じてこの世の不運もあきらめねばならないと考える。
お前にくれば俺は幸福に暮らしている。
銭はないが県議会にも出さしてもらっている。
県議会に出たのもお前のおかげだ、演説にもお前の名をいうた、慙もよくお前をいうた。
母も丈夫だ、綾子も丈夫で良人をむかえた。
吾々一家の不幸をお前一人でせおってくれたと一家感謝している。
(この項書き乍ら涙が出て書けない、書く暇がないため帰りの船の中で書く
慙はお前に便りを書いたから多分自分自身のことは書いてあるだろうから略す)

これだけの事は墓前でいいかった。余り自分だけで永く祈ってもいられないし
胸がふさがってただただ頭を下げて心からお祈りした次第であった。
式が終わってわれわれ遺族だけ司令官の自動車を借りて、この地の司令官ツウエー少尉
の運転で501柱の墓地小沼の辺りに参り線香、灯明を上げて拝んできた。
米兵はわれわれの望むとうりに良く世話してくれた、そしてもとの追悼碑のところに
引返したら皆帰って1人もいなかった。
遺族だけ5人にてツウエー少尉にめいめいのカメラに入れてもらい、山崎大佐戦死の場所
に下車、写真を撮り7時帰船した。

昭和28年7月18日(17日) 霧

6時起床、7時朝食、9時出航予定

今日は帰国のため8時より1時間ばかり米軍の本部にて買物よろしいといわれ1時間内に
急ぎ米軍の自動車にのり買物にいった。休憩所には玉突き2ヶ気持ち良くしてある。
言葉が通じないから山崎氏などの通訳にて煙草、安全カミソリ等20ドルの金は5セント
残して買った。急いで自動車にて帰ったら直ぐ発船した、米兵みんな出て見送って
くれた。米兵も見えなくなつてからも甲板に立って戦場の方を眺めているいろいろ考え
伴の事など次から次へと浮び俺1人だけ前甲板の倉庫のかげに立ってだんだん見えなく
なる島を眺めて乍ら涙を流していたら石田という人がこられ御遺族の御心中御察し
申しますと手をにぎられ、ぬぐえどもぬぐえども涙が出て仕方なかった。

さらば倅よ 皆さんよ

一生来られぬアツツの島で安らかにねむって下さい

心に念じ乍ら島が見えなくなるまで立っていた。

昼食の知らせで中に入り、昼食そこそこで又出て見たら、霧がはれて島の北端の方が
少し見えたがまもなく大海原のみとなり淋しい気持ちになった。

室にもどり暫く考えに沈んでいた。14時海上慰霊祭に出る事を云い渡されたから服装を
整えているとはじめる知らせが来たので参列し前の海上慰霊祭と同じ

要領で行なわれた。ただ花輪は政府のものだけ残して全部海上に捧げ冥福を祈った。

アリューシャン沖海域での戦没者、艦船は

戦没者 2,700名 沈没艦船 32隻

E 174~40

N 53~20

室に戻っておそなえた食物、お菓子類を全部に分けて渡し、船員にもみな分けて
渡された。

その晩は御神酒をみんなで頂き直会の如きをやった。

昭和28年7月19日 霧

今日は何れを見ても海ばかり、船は動揺皆島での作業でつかれたか床に入る。
晩になったら低気圧がくるというので丸窓を嚴重に船員と共に閉める。
余り荒れなければと思ひ早く菓のんで床に就いた。かなりゆれるが、思った程でもなくよくねむれた。

昭和28年7月20日 霧後小雨

昨日夜12時、1時間おくらした時計は6時になった。
起床7時朝食、なすこともないから床に入って本を見る。今晚から又1時間おくらせる。
低気圧をさけて4時間位南に船をむけたそうだ。
東京入港は少しおくれる見込みの如し、あまり動揺もせずすんだ。
20度位であった由、寝台の上で日記かいたり読書したり、ねむったりした。
夜も何時もの通り調子良好、酒を鎌田君来り少しのんだ。

昭和28年7月21日

天気良し、うすい霧にて水平線まで見渡せる、もうあきて余り見る気もおこらない。
今日午前1時から又時計をおくらせた。体調良い、早く内地に帰りたい。
皆おなじ事をいう、船の中が何となくいやなものだ。

昭和28年7月22日 雨（午後晴れ）

天候に恵まれて大した波もなくここまで来た、北海道沖の由、午前1時から又1時間
おくらしたから内地と同じになった。
アツクを出てから5日目、23日上陸出来る、仕事もないから床の上にて会話したり本を
見て日を送った。 夜食8時、今夜はソーメン

昭和28年7月23日 濃霧

8時頃岩手沖の由、少し雨が降って来た、12時ニュースで岩手県洪水という心配だ。
夜7時のニュースで花巻朝日橋と黒沢尻びしゃもん橋の間は危険とあり、まだ雨が
やまない如く心配だ。瀬川の切替え工事が進んでおれば心配ないと思うが。

昭和28年7月24日

朝雨がやんだようだ、いよいよ今日は陸地が見えるだろうと皆甲板に上がり見る。
なかなか見えない、12時頃雲間に陸地の如きが見えはじめた犬吠岬の如し。
漁船もあちこち見えはじめ、だんだん灯台も見えはじめた。
今日中に上陸出来るのだが25日と決まっているので東京湾沖にて夜をあかす事になる由
明日上陸というので皆元気、夕食後持参の食物、飲物を持寄って晩さん会を開く、僕も
持参の酒が余ったので皆にふるまう。酒は余り飲みたくなないので室に帰り寝台に横になり
6日出港以来の事を思い浮べ短い航海といい乍らも生涯忘れざる思い出の旅行であった。
親として子の死に場所を訪ねし吾はそれからそれへと子供の時、小中高校時代、大学時代
入営、出征、戦死、今日と走馬灯の如く浮び仲々ねむれない。
夜おきてかきなぐる。明日の上陸のため手回り品を荷造りする。
九十九里浜沖にて各新聞社、NHK等ヘリコプター小型船等にて皆ニュースのそうだと戦
僕は岩手日報と約束があるから渡さなかった。

昭和28年7月25日

6時頃検えきが終り上陸準備、今日は日報社の方が見えるだろう。原稿を渡さねばと
探したが見えない。
船は出航した竹芝棧橋に近づく、多勢の出迎人が見える、原稿探したが見えない。
船は棧橋に着く、見えないさがしていると慥はたまりかねたと見えて船に入ってきた、
あきらめて甲板に昇る。
陸地には妻が嬉し涙にくれて迎えに来ていた。長瀬さんもいた。
甲板にて簡単な式を行い、遺骨をもって上陸、自動車に分乗、厚生省にむかう。
港には遺族その他にて人の山、皆泣きはらしておられる。
僕も涙が出るのをジッとこらえるのに骨がおれた。